「コンパクトライフ・プロジェクト」に関する一考察

—— 言語生態学的視点から ——

小田珠生、野口　靖
基礎教育課程、インタラクティブメディア学科

Consideration of the *Compact Life Project* from the Standpoint of Linguistic Ecology

ODA Tamaki, NOGUCHI Yasushi
Division of Liberal Arts and Science, Department of Interactive Media
(Received October 30, 2020；Accepted December 9, 2020)

キーワード：コンパクトライフ・プロジェクト、言語生態学、インタビュー

Abstract

Yasushi Noguchi's *Compact Life Project* prompts us to reconsider our "devotion to large scale" by delving into the lives of people of different countries—Kenya, Japan, Sweden, and so on—who live remarkably simple lives.

This study investigates the life of a woman living in the slums of Kenya covered by this project, and adopts *linguistic ecology* as a theoretical framework to explore how language functions for this woman in a wholly different language environment from Japan. More specifically, we assess the speech of this woman through semi-structured interviews on the theme "interpersonal relationships in my life up to now," and consider how language functions for her and how she networks with others. In other words, the study qualitatively examines whether she is consciously aware she is building mutual negotiative relationships as she goes about living her life.

We found that even in the slums of Kenya which are far removed from Kakamega where this woman is from, she consciously maintains relations with her blood relatives and continue to speak her own native dialect, which suggests that these behavioral traits are linked to her own cognitive and sentimental stability.

1.　はじめに

人間としての活動は、「言語」に支えられている。言い換えれば、「言語」と一体化していると言っても過言ではない。なぜなら、人間は言語を用いて思考し、他者との言語のやりとりによって築かれるネットワークの中で生活しているからである。

しかしながら、グローバル化の波に晒されている近年の日本では、「言語」が機能していないことによる社会問題が顕在化している。例えば、高齢者の社会的孤立や、価値観の変動・移動に伴う家族関係の分断など、多くの社会問題が、実は「言語」の機能不全に起因すると言えよう。特に、新型コロナウィルス感染症への感染を予防するために他者との接触を避ける昨今は、ますます「言語」を十分に機能させることの重要性について再考しなければならない時期であると考えられる。

野口・小田（2017）における野口の作品は、ケニアのスラムで暮らすある女性の生活を丁寧に追うことを試みたドキュメント映像である。人類学の分野において、松田（2012）は、当該女性が暮らすケニアの市井の人々が、上からの援護に頼らず創意工夫をこらしてつくりだした相互扶助の思想とシステムは、これからの世界にとって資産になるであろうと述べているが、それでは、野口の作品に登場する女性は、ケニアにおいてどのように「言語」を機能させながら人々とネットワークを築いているのであろうか。

本稿は、野口の企画「コンパクトライフ・プロジェクト」の一環として制作されたドキュメント映像作品（野口・小田2017）に登場するあるケニア人女性に注目し、彼女の言語の在り方を「言語生態学」を理論的枠組みとして捉えるものである。

2.　理論的枠組み

2.1.　言語生態学について

まず、本研究で理論的支柱とする言語生態学について説明する。「言語生態学」は、「ある所与の言語とそれを取り巻く環境の間の相互交渉的関係の学」と定義されるものである（Haugen1972）。

言語生態学の「言語生態」とは、言語の状況を指す。言語の状況とは、具体的には、ある言語の、認知･情意･社会・文化的諸機能が、個人・集団の中でどのように働いているかという状態のことである(岡崎2007)。例えば、日本語以外を母語とする子どもが、来日直後に日本語が全く分からない状態で、日本語で行われる学校の授業に参加した場合、すでに母語で獲得している認知的な能力は十分に発揮できない上に日本語での新しい知識を習得することが困難である。その場合、彼らの「言語生態は良好ではない」ということになる。なお、「言語生態学」では、言語を人間から切り離された「分離された実体」として捉えず、言語生態が順調に形成されているか否かと、言語話者（＝人間）の生態が良好か否かは相補関係にあるとする。そのため、先ほど例に挙げた子どもの場合、「言語生態が良好でない」場合は、その言語話者である「子ども自身の生態が良好でない」と考える。すなわち、「言語の福祉状況（wellbeing)」と「人間の福祉状況」は連関関係にあるということになる。

次に、言語生態学の定義内にある「(言語を取り巻く)環境」について言及する。「言語生態学」では、先ほど挙げた子どもの例のように、「言語」が十分に機能していない状況、つまり「言語生態が良好ではない」状況にある場合、言語の「生態環境」を改善する必要があると考える。この言語の「生態環境」には「内」、「外」の二つの領域があり、一つは、バイリンガルや多言語使用者のmind（知性・精神）の中での、ある言語とほかの言語との相互交渉的関係が形成される「内的生態環境」、もう一つは、ある言語と、その言語がコミュニケーションの手段として機能する社会の様々な要因との間の相互交渉的関係が形成される「外的生態環境」である。

「外的生態環境」、言い換えれば人と人とのつながりからなる「言語接触のネットワーク」でのやりとりを通して、人は「内的生態環境」、つまり個人の内的に言語・認知・情意のネットワークを形成していく。たとえば、子どもは、自分の家族を中心とするさまざまな人と言語を使ってネットワークを築いていく（図1、小田2012)。そして、そこでの言語を使用したやりとりを通して、たとえば､「apple − delicious − red − fruit」というように、自分の頭の中に言語・認知・情意のネットワークを作っていくと言える（図2、小田同上)。

以上から分かるように、また、定義にも示されているように、言語生態学では、「関係」が中心的な対象とされている。すなわち、出来事、現象を多くの事柄のつながり、つまり「関係」からなると捉え、それらは周囲を形作る環境との間の相互交渉によって成り立ち、推移していくものという認識に立つ。そして、もしその「関係のあり方」に問題が認められた場合、その「関係のあり方」をどのように保全・育成していくかということが、言語生態学の重要な目的の一つとなるのである（岡崎2009)。

2.2. 「言葉が十分に機能していない」という問題

それでは、言語生態学的視点に立った場合、近年の社会における問題はどのように捉えられるのであろうか。それは、端的に言えば、グローバル化により急激に変動する世界の中で、「自分たちの言葉が十分に機能していない」ということであると言える。

まず、グローバル化に伴い不断に生じるヒトやモノの移動は、人間生態系に急激な変動をもたらした。現代社会では、多くの人々が進学や就職、転勤、結婚などで、国内外にかかわらず移動を経験する。それはつまり、それまで自分が家族、職場、学校、地域コミュニティなどで人々と関係を築いてきたネットワークから離脱し、新しく生活する場で新たにネットワークを築いていかなければならないことを意味する。しかしながら、人々が流動する社会で他者とネットワークを築くことは容易ではなく、実際には隣に誰が住んでいるのかも定かではないことが珍しくない。既に述べたように、人は他者との関係・つながりからなる「言語接触のネットワーク」、つ

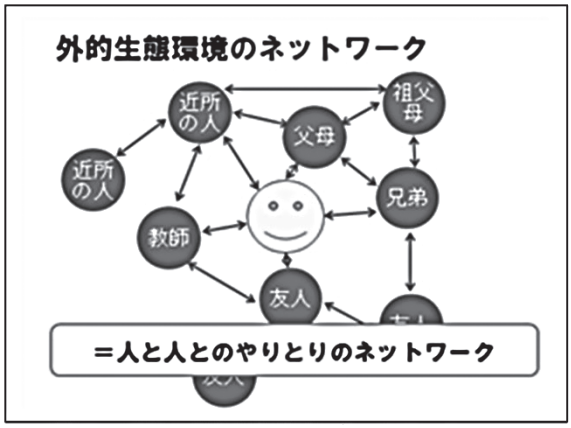

図 1.　言語の外的生態環境のネットワーク

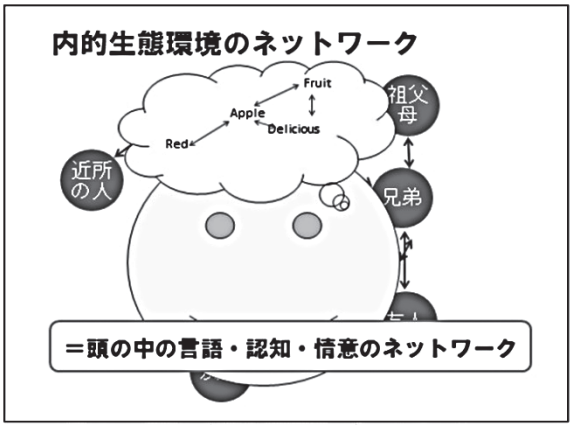

図 2.　言語の内的生態環境のネットワーク

まり言語の「外的生態環境」でのやりとりを通して、言語の「内的生態環境」、つまり個人の内的に言語・認知・情意のネットワークを形成していく。しかし、ごく限られた行動基準しか設定できない小さなネットワークの中では、広い世界観やその世界に住む他者との人間関係観、あるいは豊かな想像力等を自分の中に培っていくことが難しい（岡崎2007）。

さらに、グローバル化の下で世界は絶えず変動し、言葉は内実を失いつつある（岡崎2009）。例えば、「雇用」という言葉を挙げると、かつての日本では、就職後は終身「雇用」の下で、結婚し、子どもを授かり、家庭を築きながら退職するまで働くという、皆にとって「当たり前」の人生設計が各々の頭の中でイメージされていた。しかしながら、グローバル化社会において企業同士が生き残りをかけて熾烈な競争を繰り広げる中、昨今は新型コロナウイルス感染症の感染拡大による景気低迷もあり、2020年8月現在の完全失業率は206万人にのぼるという（総務省2020）。もはや「雇用」という言葉は、以前とは異なり恃むことのできない何かを意味するものに変容してしまったと言わざるを得ない。このように、人生の見通しを立てることが大変難しい状況、つまり自分の想像力をはるかに超えた危機的状況において、若者は使い慣れているはずの様々な言葉が今何を意味するものなのかも把握できず、未来の自分像を言葉にして具体的に捉えることが困難なのが現状である。また、何かを聞いたり読んだりしても自分と関連付けながらリアリティーを持って内容を捉えることができず、言葉の形骸化、及び想像力の縮退はますます加速する。

これらの状況は、日本をはじめ、多くの先進国や新興国と呼ばれる国で生じている。このようなグローバル化社会の下での若者をはじめとする人々の言語生態の貧困化及び想像力の縮退が、現在の持続不可能な社会から持続可能な社会への正の転換を難しくしていることは想像に難くない。

それでは、今後、自分たちの社会で言語を十分に機能させ、言語生態環境を保全・育成していくためにはどうしたらよいのであろうか。その手掛かりを得るために、様々な地域の言語生態の実態を調査・分析することは有用であると考えられる。本稿では、特に日本とは全く異なる言語生態にあると推測されるケニアのスラム・カワンガレで、ある女性がどのような言語生態環境の下に生活しているのかを探りたい。なお、分析にあたっては、野口の企画「コンパクトライフ・プロジェクト」の一環として制作されたドキュメント映像作品（野口・小田2017）のために収集されたデータを用いる。

3. 「コンパクトライフ・プロジェクト」について

3.1. 企画の概要

野口により企画・立案された「コンパクトライフ・プロジェクト」は、全く状況が異なる環境でコンパクトに生活している人々の暮らしぶりを探ることを課題とするプロジェクトである。このプロジェクトは、もともとは2011年の3.11以降、日本中で一度はエネルギーの大量消費を反省し、生活スタイルを変え、持続可能な社会を目指す機運が高まったかに見えたにもかかわらず、現在はそういった考え方が殆どの人の頭の中から消えてしまったようであることへの危機感から始まった。

そのような危機感を抱いていた頃、野口は別のプロジェクトでナイロビのスラムに何度か訪れた際、出稼ぎ移民の人々がスラム内の小さな居住空間の中で、したたかに生活するタフさに興味を持ち、より大きい方が良いとする「巨大信仰」（シューマッハー1986）に対して改めて疑問を抱くようになった。彼らは$3 \times 3m^2$程度の居住空間に一家5人以上で住んでいることもあったが、悲壮感は見られず、工夫しながら居住空間を最大限に利用し、たくましく生活していたという。

そこでは、現代の日本とは全く異なる人々の暮らしぶりが展開されていた。そして、野口はその暮らしぶりを見て、家に住むことによる幸福感は、必ずしも家の「大きさ」によって決まるものではなく、むしろその家がどういったコミュニティの中にあって、人との交流がどのように成立しているかによるところが大きいのではないのかと改めて考えるに至ったのである。

「コンパクトライフ・プロジェクト」では、今回のケニアのナイロビをはじめ、日本、スウェーデン等、さまざま状況下におけるコンパクトな生活を観察・記録し、そこで得たインタビュー及び映像データを作品にして順次展示している。それらの作品展示を通して、もう一度エネルギー問題や環境問題を生み出す「巨大信仰」について再考を促す契機を提供することが、当該プロジェクトの目的である。

3.2. フィールドについて

次に、今回「コンパクトライフ・プロジェクト」のフィールドとなったケニア、及び首都ナイロビのスラム・カワンガレについて述べる。

ケニア（正式名称：ケニア共和国）は人口が5,257.4万人であり（外務省2020）、10の主要民族と、公用語である英語、国語であるスワヒリ語以外に40以上の民族言語を擁する多言語・多民族国家である。

同国はキリスト教国であるが、それは1963年に独立するまでイギリスの植民地だった影響も大きい。その内

訳は、プロテスタント48%、カトリック23%、その他キリスト教12%、イスラーム教11%、その他6%である（以上、津田2012）。

学校教育は小学校8年、中等学校4年、大学4年である。ケニアの学校教育の実態については把握することは容易ではなく、平均的な学校像を描くことはさらに難しいというが、2003年に初等教育の無償化が導入されてから、小学校の純就学率が2009年には男78%、女80%と急激に上がったという。しかしながら地域間、また首都ナイロビであっても都市部とスラムでは就学の機会に大きな格差があり、2009年の中等学校への純就学率はナイロビに限っては53%、ただし国全体では18%である（以上、澤村2012）。スラムの学校教育の現状に関しては、様々な支援がなされているが、多くの人々にとって十分な学校教育を受ける環境にないことが推測される。

医療に関しては、病院はprivate hospital（ビジネスとしての私立病院）、public hospital（国立病院から地方の県病院、末端の診療所まで）、faith-based hospital（いわゆるミッション系、NGO系の病院）の三つに分類され、高額の私立病院であれば日本と遜色ないという。しかし、そのような高額私立病院で治療を受けることができるのは外国人などごく一部の人間であって、多くのケニア人は経済的な理由でけがや病気の時でもすぐに病院に行くことはなく、最終手段として小さな薬局や診療所あるいは公立病院やミッション系、NGO系の病院に行ったとしても、優良な医療サービスを受けられるわけではない（以上、嶋田2012）。また、ケニアでは1984年に初めてHIV感染者が報告され、1999年に当時の大統領がHIV/エイズを「国家的災害である」と宣言した。様々な施策や援助が功を奏し、世界銀行の調査によると2000年には8.9%だった15～49歳の感染率は2015年には5.1%まで減少したが、それでもHIV/エイズに苦しんでいる人々が大変多いことに変わりはない。

カワンガレは、ケニアの首都ナイロビの西部に位置するスラムである。2009年の国勢調査で人口が約13万人とされたとの情報もあるが、同じようにナイロビの南西部にあるアフリカ最大級のスラム・キベラが国勢調査で人口17万人だとされたにも関わらず、実際には推定80万人もの人口を抱えていると言われていることから（菊本2012）、正確な人口については確認することが難しい。キベラには人口増加を支えるだけの農地が足りない等で仕事を求めて都市部にやってきた人々が集まるというが、カワンガレにも様々な理由で様々な言語を話す多様な民族の人々が集まっている。水道・道路・電気等のインフラ設備に関しては、ナイロビの都市部と比べるべくもないが、カワンガレにもキベラと同じく電気は通っている。

3.3. 対象者について

「コンパクトライフ・プロジェクト」において野口が特に注目し、その生活を詳細に追ったカワンガレに住む女性（以下、Eとする）について詳述する。

Eは、1964年生まれ（2018年現在54歳）で、ケニア南西部にあるカカメガ出身の、ルイヤ族の女性である。現在カワンガレにおいては、ほぼ英語とスワヒリ語で生活している。実家は農業を営んでおり、1981年（Eは当時18～19歳であったと述べているが、現在の年齢及び出生年から逆算すると17歳となる。本稿では、年時と現在の年齢からの判断を優先し、当時Eは17歳であったと考える）に、仕事を求めてナイロビに移住した。その後、ハウスキーパーの仕事の経験を積んだ後、1991年（27歳）に日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター（以下、JSPSとする）でハウスキーパーとしての職を得、現在も継続して働いている。JSPSでの仕事は週休二日制で、9：00頃から17：00頃まで働いて、月収は推定8000シリング（2018年8月現在、日本円で約8800円）程度である。結婚し、二人目の娘を産んだ後に離婚したため、現在は娘二人（ともに無職）とともに、およそ3.5×3.5m^2の家（部屋）に暮らしている。また、現在、ペンテコステ派（キリスト教プロテスタントの一派）の教会に通っている。

なお、野口とは、野口が2009年以降、ほぼ毎年JSPSを訪ねていたため、そこで知り合った。野口がEを当該プロジェクトの対象としたのは、Eが離婚を経験したシングルマザーであり、本人曰く「困難を抱えている」状況であるにもかかわらず、たくましく前向きに生きている様子に興味を持ったためである。

4. 研究方法

4.1. 研究課題

以上を踏まえ、本稿では、ナイロビのスラムで暮らすある女性の言語生態環境を明らかにすることによって、言語生態環境の保全・育成に関する示唆を得ることを目的とし、以下を研究課題として定める。

研究課題：「コンパクトライフ・プロジェクト」に参加した、現在ナイロビのスラム・カワンガレで暮らすある女性は、どのような言語生態環境の下で生活を営んできたか。

4.2. データ

分析には、「コンパクトライフ・プロジェクト」の一環としての作品の制作を目的とし、野口によりカワンガ

レで収集されたデータを用いる。

主なデータは、野口が2017年8月26、27日と、2018年8月18日にEに対して英語で行った、「これまでの人生における対人関係」をテーマとする半構造化インタビューの映像における発話を文字起こしした文字化資料である。また、補助データとして、野口が2017年8月20、24、26、27日にEに密着してその生活の様子をビデオカメラで撮影した映像データと、2017年8月27日に同じく野口がEの次女（以下、Wとする）に対して、さらに2017年8月29日にEの末妹（以下、Cとする）に対して行ったインタビューデータを用いた。

4.3. 分析の方法

インタビューデータにおけるEの発話を対象とし、研究目的に照らし合わせながら、Eがどのように言語を機能させ、他者とネットワーク、すなわち相互交渉的関係を築きながら生活を営んでいるかを質的に探った。なお、ある出来事の生じた年時及びEの年齢について、2017年に行なったインタビューにおける発話の中で矛盾が生じた場合は、2018年のインタビューにおいて確認をとったが、本人にも正確な時期を断定することが不可能なケースもあった。その場合は、できる限りEの発話を尊重しつつ、補助データを参考にしながら、慎重に分析者が推測して年時及び年齢を判断した。

5. 分析結果と考察

Eはカカメガで生まれ育ったが、1981年、17歳の時に仕事を求めてナイロビに移住し、2018年（54歳）現在は都市部でハウスキーパーの仕事をしながらカワンガレに住んでいる。Eへのインタビューを分析すると、Eは故郷のカカメガで主に民族語のルイヤ語を話す環境下にあったが、圧倒的にスワヒリ語を使用する人が多いナイロビでも、血縁者との関係を継続させながらルイヤ語を使い続けていることが明らかになった。以下、Eの外的生態環境の変化に基づき「故郷カカメガにいたころのネットワーク（1964～）」、「ナイロビのスラム（カンゲミ・カベテ）に移住してからのネットワーク（1981頃～）」、「ナイロビのスラム（カワンガレ）に移住してからのネットワーク（2003～）」の三段階に分けて彼女の言語使用状況を記述し、考察する。

①故郷カカメガにいたころのネットワーク（1964～）

インタビューにおけるE自身の発話によると、Eは1964年にカカメガ県ビヒガー村で、両親の三番目の子どもとして生まれたという。民族としてはルイヤ族に属し、民族語はルイヤ語である。

生まれた時には祖父はすでに亡くなっていたため、はじめは祖母、父、母、姉2人、Eの5人家族であったが、しばらくして妹と弟が生まれた。Eは幼い頃は恥ずかしがり屋であったが、近所の子どもとよく遊び、よく親の手伝いをする子どもであった。家族と友人とのコミュニケーションには、専ら民族語のルイヤ語を用いていたという。

しかしながら、1978年、Eが14歳のとき、母親が末の妹（6人目の子ども）であるCを出産後、37歳の若さで亡くなる。Eは当時学校に通っており、そこでスワヒリ語（国語、公用語）と英語（公用語）を学んでいたが、農夫である父親に経済力がなかったため、その後学校へ通い続けることを断念した。祖母はEに様々な仕事を教えてくれる人で「好き」だったが、父は粗暴な人で、Eは弟妹の世話を担うこととあいなった。

母親の死から1年後、父方の従兄弟の妻が教員向けの大学に通っている間、2年間仕事として彼らの子どもの世話をすることになった。従兄弟とはルイヤ語で会話をし、Eによると仕事では9：1の割合でルイヤ語とスワヒリ語を使用していたという。

当時のEの「言語の外的生態環境のネットワーク」は、図3. のようにまとめられる。

5.2. ナイロビのスラム（カンゲミ・カベテ）に移住してからのネットワーク（1981頃～）

1981年、17歳のときに、Eは仕事を求めて母方の叔母が住むナイロビのスラム、カンゲミに移住した。最初は叔母と一緒に暮らし、2年ほどカンゲミに住んだ後、別のスラムであるカベテに移ったという。ナイロビでは様々な民族の人々が暮らしており、ルイヤ語は分からない人が多いので、公用語であるスワヒリ語を生活言語として使用せざるを得なかった。もとは恥ずかしがり屋であったEも、必要に迫られて社交的になっていったという。

移住後はまず、1981年から1991年まで10年間ほどインド人の家庭のハウスキーパーとして働いた。仕事で使用した言語は、スワヒリ語であった。

その後、1991年（27歳）からJSPSでハウスキーパーとして仕事を始め、現在に至る。途中、個人宅でハウスキーパーをしていた時期もあったが、1年ほどでJSPSに戻った。JSPSでは、所長や研究者（ともに日本人）とは英語、ルイヤ系スタッフとはルイヤ語、その他のスタッフとはスワヒリ語でコミュニケーションをとっている。次の【インタビュー1】は、Eが職場で英語とスワヒリ語の他にルイヤ語を使用できると話しているときの発話である（注2）。なお、Iはインタビュアーである野口の発話を示す。

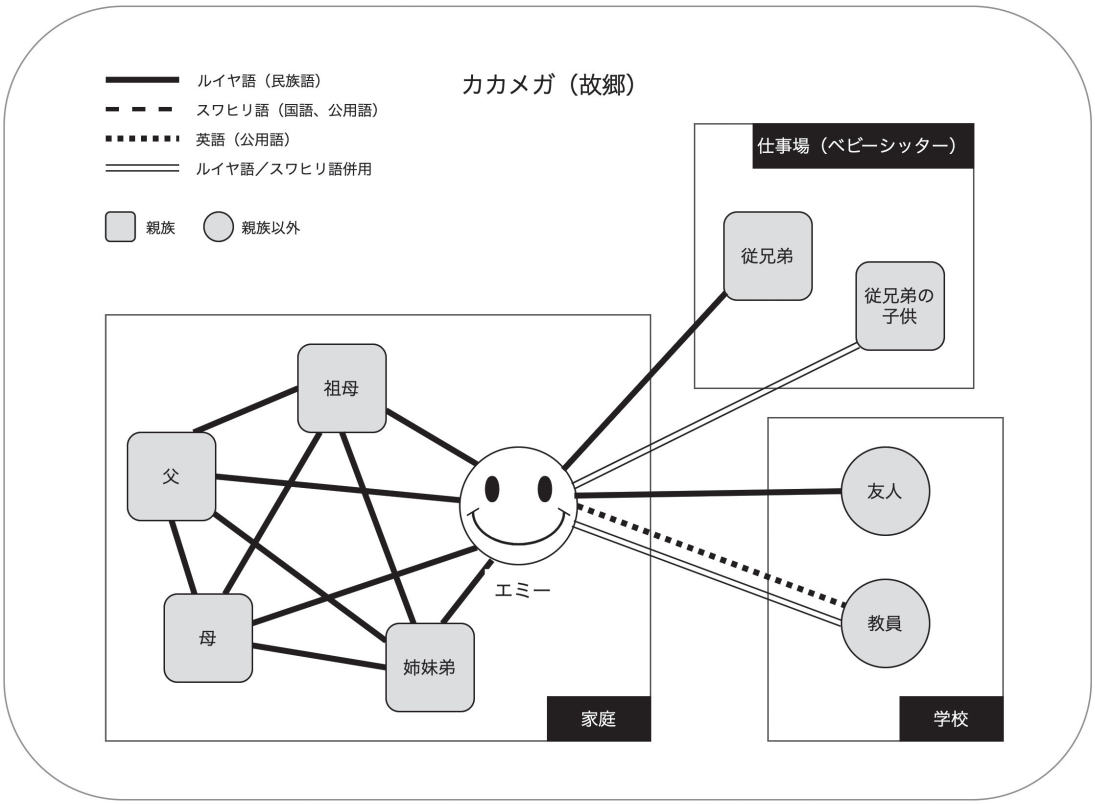

図3.　故郷カカメガにいたころのネットワーク（注1）

【インタビュー1】

01I	In JSPS, how do you use the language? Do you use English? ［JSPSでは、どのような言語を使用しますか。英語は使いますか？］
02E	English and Swahili.（略）And we have Luyia there, I can just talk Luyia language. We have ○○ and ●● and C, I can speak Luyia, but to ◆◆, I speak Swahili. ◇◇ speaks Swahili, ■■ speaks Swahili. Because they don't understand my language! ［英語とスワヒリ語を使用します。（略）それから私たちはルイヤ語も使います。私はルイヤ語で話すことができるんです。○○（スタッフの名前）と●●（スタッフの名前）とCはルイヤ語を話します。◆◆（スタッフの名前）にはスワヒリ語で話します。◇◇（スタッフの名前）にはスワヒリ語で話します。■■（スタッフの名前）にはスワヒリ語で話します。なぜなら彼らは私の言語を理解しないからです！］

Eは職場のスタッフに自分より若い人材の方がいいと思われているのではないかという不安も抱いているが、基本的にリラックスして仕事に臨めているという。

Eは、故郷カカメガで暮らす祖母と父それぞれに仕送りを続けており、以前はそれが末妹Cの学費を援助することにつながっていた。Cは故郷で小学校8年生の中途まで学校に通ったが、学費の問題で、結局中等学校に上がることは断念した。その後、1993年、Eは自身が29歳の時にCを服飾関係の学校に通わせたいと考え、彼女をナイロビに呼びよせ、一緒に暮らしはじめた。

同じころ（1993年6月）、Eは隣人でナイロビのIT企業に勤務していた元夫（現在は離婚している）と出会う。元夫は2歳年下のティリキ族で、会話ではほぼルイヤ語、時々スワヒリ語が用いられた。なお、ティリキ族は、ルイヤ族のsubtribe（亜族）である。2年後の1995年に元夫と結婚し、同年7月には長女（以下、Yとする）が生まれた。Eは自身に母親がおらず助けを求めることができないため、若い時に家庭をつくって子どもを持つことはしなかったと述べている。

Eの結婚後、CはEと共に暮らすことが困難になり、一人暮らしを始めた。Yの面倒を見ることを頼まれるなど、状況が変わったため、結局服飾の学校へは通わなかった。Cはハウスキーパーの仕事をはじめたが、ほどなくして妊娠し、彼女も結婚することとなった。2018年現在、Cは離婚調停中である。

当時（結婚後）のEの「言語の外的生態環境のネットワーク」は、図4. のようにまとめられる。

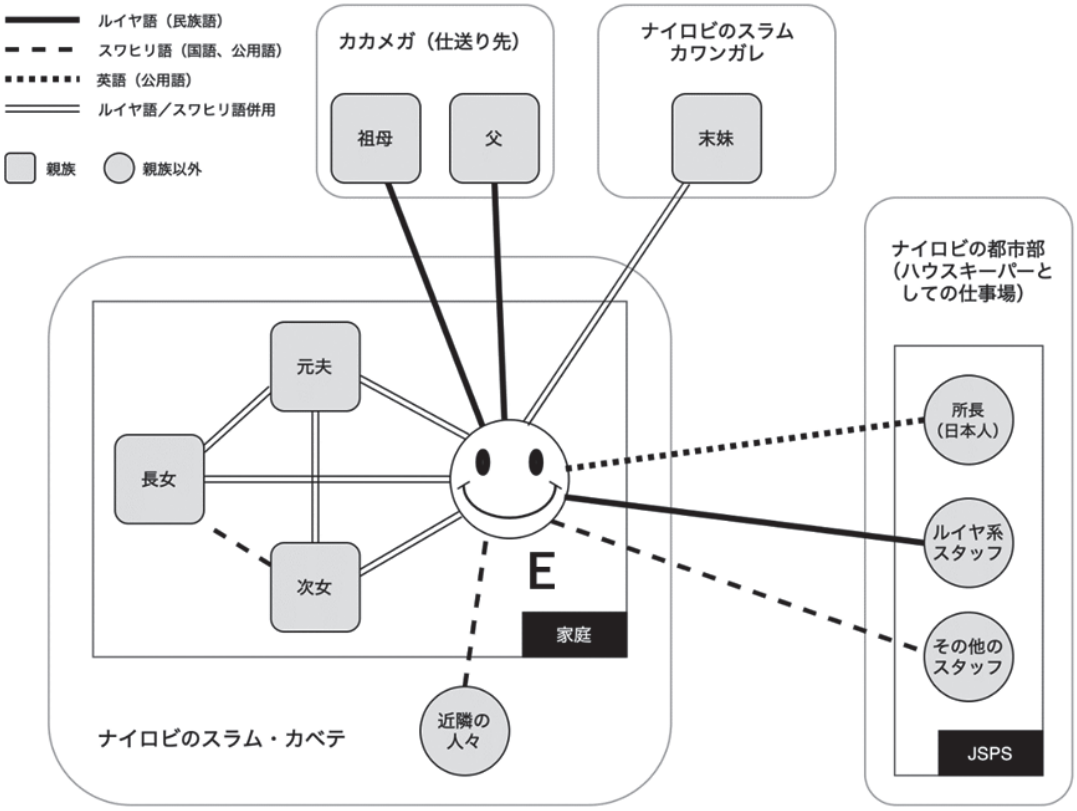

図4.　ナイロビのスラム（カベテ）に移住してからのネットワーク

5.3.　ナイロビのスラム（カワンガレ）に移住してからのネットワーク（2003～）

1997年12月8日、Eが33歳のときに次女のWが生まれる。そのころから家庭内で不和が生じ、2002年、38歳のときにEは元夫と離婚することになった。Eはカベテからキベラ、そしてまたカベテとスラムを移った後、2003年頃にカワンガレに引っ越した。その後、カワンガレ内で2006年と2016年に住居を移している。

離婚後、Eは二人の子どもを育てるために奮闘した。FIDA（Federación Internacional dé Abogadas、女性を支援する団体）に相談したが、村に帰るように言われたという。勤め先のJSPSから借金をし、それを子どもの教育費に充てるなどの苦労があった。2018年現在もEは二人の子どもと一緒に暮らしているが、長女のYはITカレッジを卒業後、今はカワンガレで求職中であり、次女のWはコンピューターの学校を出た後にカレッジを卒業し、今は人事の仕事を探しているという。次の【インタビュー2】は、Eが二人の子どもと話すときにルイヤ語とスワヒリ語を半々の割合で使用するにもかかわらず、子どもたちはほぼスワヒリ語のみを使用すると述べているEとインタビュアーとのやりとりである。その場にWもいたが、Wもほんの少しだけルイヤ語を話すと述べている。

【インタビュー2】

01I	When you talk to your daughters, you just use Luyia, right? ［あなたが娘さんに話しかけるときは、ルイヤ語だけを使うんでしょう？］
02 E	Luyia and Swahilli language, yeah. Sometimes just Swahili, when I'm talking to R, yeah. ［ルイヤ語とスワヒリ語です。時々R（姪の息子）に話しかけるときはスワヒリ語だけになるときもあります。］
03 I	So what is the percentage of Luyia and Swahili? ［ルイヤ語とスワヒリ語のパーセンテージはどれぐらいですか。］
04 E	It's the same, the same percentage, yeah. ［同じです。同じパーセンテージです。］
05 I	Your daughters speak what kind of language? They speak Swahili? Or Luyia? ［娘さんたちは何語で話しますか。スワヒリ語？ルイヤ語？］
06 E	Swahili. Y and W, they just speak Swahili. They take Swahili like their language. Most of the time. (Speaks native language). ［スワヒリ語です。YもWもスワヒリ語ばかり話します。スワヒリ語が二人の母語のようです。ほとんどいつも。（ルイヤ語で話す）］

07 I	So, you don't speak Luyia so much? ［（Wに）では、あなたはルイヤ語はあまり話しませんか。］
08W	Very little. ［ほんの少しだけ。］

また、Eは結婚後に夫に合わせてSalvation Army（救世軍、キリスト教プロテスタントの一派）に変えた信仰を、元々信仰していたペンテコステ派（同じくキリスト教プロテスタントの一派）に戻し、毎週教会に通っている。教会では、説教ではスワヒリ語が、歌には様々な言語（スワヒリ語、ルイヤ語、キカンバ語、ルオ語など）が使用される。Eは、教会は無心になれるから好きで、「今でも裕福ではないが、小さな家に住んでいても、それが神の思し召しだと思う（Even right now, we are not rich.（略）, even if I staying in this small house, it is willing of God.）」と述べている。次の【インタビュー3】は、教会で何の歌が一番好きか尋ねられたEが、スワヒリ語とルイヤ語で歌うから全て好きだと答えている発話である。

【インタビュー3】

01I	What do you like the most? ［（何の歌が）一番好きですか。］
02 E	All of them, I like. Because they sing Swahili, Luyia language. Most of them they sing in Luyia language. ［全部好きです。スワヒリ語とルイヤ語で歌うから。ほとんどをルイヤ語で歌います。］

2007年、43歳のときにE はCをJSPSに誘い、一緒に勤め始めた。E がCを誘ったのは、JSPSの所長から、Eが所長の子どもの面倒を見ている間に他の家事をする人を紹介してほしいと言われたためである。

2011年、E が47歳のときに、EやCと同じくカカメガからナイロビに移住していたEの弟が肝臓の病気で亡くなった。亡くなった時、弟には職がなかったが、ナイロビで周囲の助けを借りることができなかったという。

2016年12月、52歳のときに、Eはカワンガレ内の現在の住所に居を移した。近隣の住民には独身の若者が多く、彼らとは挨拶をする程度の関係であるという。2017年からは、Eはすぐ下の妹の娘の息子（2016年生まれ、以下Rとする）を引き取り、一緒に暮らして面倒を見ている。すぐ下の妹の娘、つまり姪は、Rの父親とは結婚

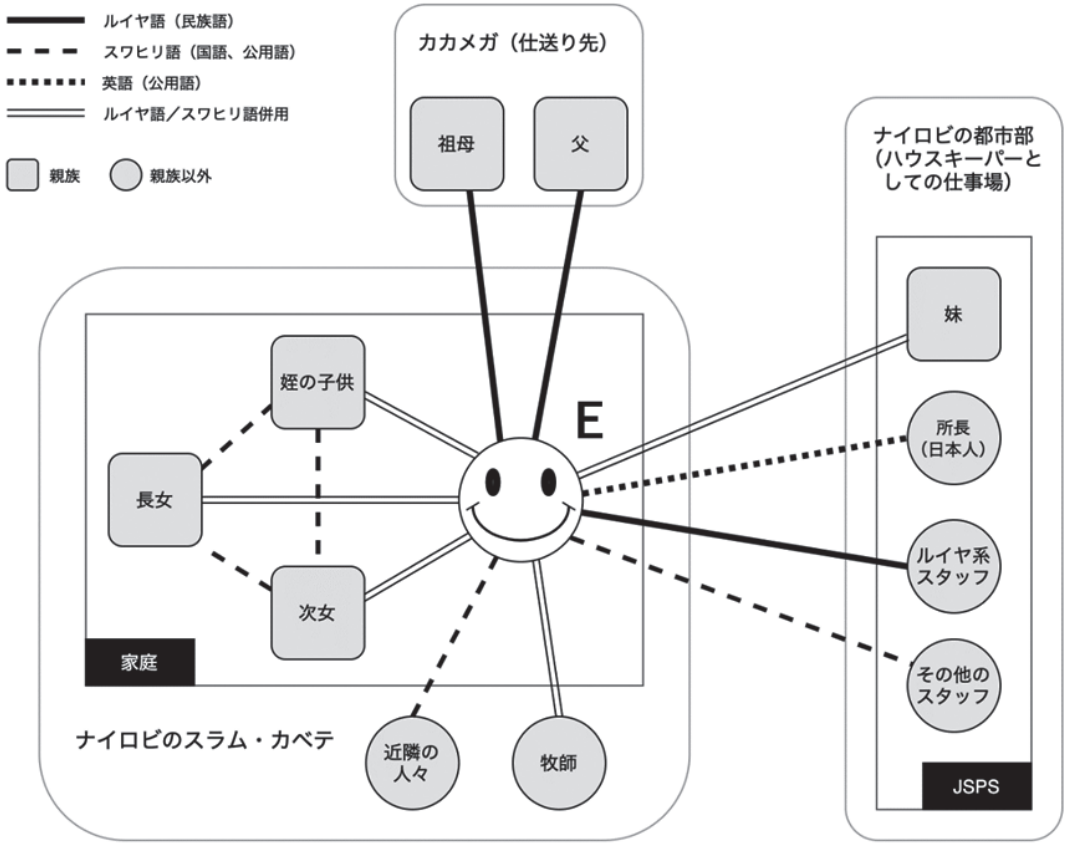

図5. ナイロビのスラム（カワンガレ）に移住してからのネットワーク

せず、他の男性と結婚したため、Rを手元で育てることができないという。現在は、E、Eの二人の子ども（Y、W)、Rの父親とRの父方の祖母でRを育てている。

当時のEの「言語の外的生態環境のネットワーク」は、図5. のようにまとめられる。

Eへのインタビューを分析すると、まず、移住後も家族・親戚との助け合いの関係が継続することにより、ルイヤ語による言語使用のネットワークの構築が続いていたことに気が付く。それに加えて、職場や教会でルイヤ語に接する機会が確保されている。それは、言い換えると、故郷カカメガにいたときと、ナイロビに移住してからの彼女の言語の外的生態環境に連続性があるということになる。

人間は言語の外的生態環境のネットワークでのやりとりを通して、自身の内的生態環境に言語・認知・情意のネットワークを築いていくものである。つまり、移住先でも故郷からの連続性の中で民族語による外的生態環境のネットワークを保持しているということは、自身が内部にもともと持っている言語・認知・情意のネットワークを、移住先でも活かしながら生活することが可能であることを意味する。推測の域を出ないが、野口が「コンパクトライフ・プロジェクト」に取り組むにあたって、彼女のことを直感的に「たくましく前向きに生きている」と捉えた背景に、故郷にいたときから継続する彼女と家族・親戚との関係、及びそれと一体化した民族語の使用があることは十分考えられよう。

一方で、Eの二人の子どもが家庭内でもルイヤ語よりもスワヒリ語の方が使う機会が多いことも注目される。今後、Eの孫、ひ孫がルイヤ語を獲得できるかどうかは未知数であり、Eの民族語による外的生態環境のネットワークは、Eの代で「保持」されてはいても、十分に「発達」しているとは言い難い。グローバル化社会が抱える言語多様性の保全に関する問題は、ここでも共通のものとして存在しているように思われる。

6. おわりに

本研究では、野口によって収集された「コンパクトライフ・プロジェクト」に関するデータをもとに、現在ケニアのスラム・カワンガレに住むある女性が、どのような言語生態環境の下で生活を営んできたかということを探った。その結果、その女性は、移住先のナイロビのスラムでも、故郷からの連続性の中で民族語による外的生態環境のネットワークを保持していることが明らかになった。ケニアには、人々の間に自発的な相互扶助のシステムがあるというが、当該女性に関しては、助け合いの関係がまず家族・親戚の間で当たり前のように築かれていることが伺われた。

グローバル化社会においては、日本を含め多くの国の人々が移動を経験するが、移動先においてもともと自分が属していた言語の外的生態環境のネットワークから完全に離れ、新たにネットワークを築かなければならないケースも多い。そのことが、人と人との関係性を希薄にし、視野を限られたものにすることもある。本稿におけるEのケースにみられるような、家族・親戚を基盤とした助け合いの関係からは、改めて学ぶことがあるのではないだろうか。しかしながら、少数派言語の衰退に歯止めをかけ、言語の多様性を保全するにはどうしたらよいかという点に関しては、グローバル化社会が抱える共通の問題として引き続き考えていく必要があると考えられる。

今後は、Eが実際の生活場面でどのように各言語を使用しているかを分析すること、また様々な事例の分析を積み重ねることを課題としたい。

（注）

1. 図においては、煩雑さを避けるため、家族のみE以外の人物についても互いに使用していた言語を示し、その他はEとの間で使用していた言語のみを示した。また、図4と図5については、Eの子どもと祖母、母、妹、姪の子ども以外のEの家族・親戚は省略した。
2. インタビューの引用においては、文法の正誤に関わらずEの発話をそのまま記述することを優先した。そのため、英語の直訳が不可能な場合は、文脈からの判断による意訳を付した。

【参考文献】

E.F.シューマッハー,『スモール イズ ビューティフル 人間中心の経済学』，小島慶三・酒井懋訳，講談社, 1986.

ARC国別情勢研究会,「ARCレポート　ケニア2017／18版」，2016.

岡崎敏雄,「年少者日本語教育と母語保持－日本語・母語相互育成学習における学習のデザイン－」，鎌田修・筒井通雄・畑佐由紀子・ナズアキン富美子・岡まゆみ編『言語教育の新展開－牧野成一教授古希記念論集－』，ひつじ書房，2005，383-397.

岡崎敏雄,「外国人年少者の心理・社会的要因が日本語学習言語の習得に及ぼす影響の研究」,『平成16~18年度科学研究費補助金研究基盤研究C(2)　研究成果報告書』，日本学術振興会 2007.

岡崎敏雄,『言語生態学と言語教育－人間の存在を支えるものとしての言語－』，凡人社，2009.

小田珠生,「言語少数派の子どもに対する父母と協働の持続型ケアモデルに基づく支援授業の可能性－言語生態学の視点から－」，お茶の水女子大学人間文化研究科国際日本学専攻 平成

21年度博士学位論文，2010.
小田珠生,「言語少数派生徒のための「父母と協働の持続型ケアモデル」の可能性－母親に対するインタビュー調査から－」,『言語文化と日本語教育』，第42号，2011, 1-10.
小田珠生,「言語少数派の母親の教育参加における領域の拡大－日本人支援者との協働の下で－」,『多言語多文化―実践と研究』，東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター，4号，2012，122-147.
小田珠生・野口靖,「『コンパクトライフ・プロジェクト』に関する一考察 ―インタビューデータの分析から ―」，芸術学部フェスタ，企画展出典（ポスター発表），2018.
外務省,「ケニア共和国（Republic of Kenya）基礎データ」,
＜ http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/kenya/data.html#section1 ＞, 2020, 2020年10月1日アクセス
菊本照子,「「スラム」の暮らし――キベラの虎の穴に電気が来た」,第43章，松田素二･津田みわ編,『ケニアを知るための55章』，明石書店，2012，264-268.
澤村伸英,「試験中心の学校生活――選抜される子どもたち」，第28章，松田素二・津田みわ編,『ケニアを知るための55章』，明石書店，2012，158-162.
品川大輔,「言語的多様性とアイデンティティ、エスニシティ、そしてナショナリティ―ケニアの言語動態」，第11章，梶茂樹・砂野幸稔編,『アフリカのことばと社会 多言語状況を生きるということ』，三元社，2009, 309-348.
嶋田雅曉,「医療の現実――地獄の沙汰も金次第」，第34章，松田素二・津田みわ編,『ケニアを知るための55章』，明石書店，2012, 197-201.
総務省,「労働力調査（基本集計）2020年（令和2年）8月分結果」,
＜https://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/index.html＞，2020，2020年10月20日アクセス
津田みわ,「ケニアへの招待――「遠いアフリカ」から「地続きの」社会へ」，第1章，松田素二・津田みわ編,『ケニアを知るための55章』，明石書店，2012，12-21.
野口靖,「ケニアの人々の暮らしや歴史を、独自のメディアで表現する――フィールドワーク、アート、テクノロジーの関係」,第10章，椎野若菜･福井幸太郎編,『100万人のフィールドワーカーシリーズ マスメディアとフィールドワーカー』, 古今書院，2017，165-178.
野口靖・小田珠生,「コンパクトハウス・プロジェクト」，芸術学部フェスタ，企画展出典（映像作品と考察），2017.
松田素二,「「相互に学び合うパートナーとして――同時代を生きる地続きの隣人」，第55章，松田素二・津田みわ編,『ケニアを知るための55章』，明石書店，2012，343-346.
Haugen, E. , 1972, The ecology of language. Stanford: Stanford University Press.
KENYA NATIONAL BUREAU OF STATISTICS（KNBS）, 2016, Kenya 2009 Population and Housing Census, Retrieved October 1, 2017, from
http://statistics.knbs.or.ke/nada/index.php/catalog/55
THE WORLD BANK, HIV prevalence among population ages 15-49, Retrieved October 1, 2020, from
http://databank.worldbank.org/data/views/reports/ReportWidgetCustom.aspx?Report_Name=3.3-HIV-prevalence-among-population-ages-15-49-&Id=283de5c6
UNdata A world of information, 2016, Country profile: Kenya, Retrieved October 1, 2020, from http://data.un.org/CountryProfile.aspx?crName=Kenya